転生―エクソシスト―祓魔師

荒戸孝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
転生―エクソシスト―祓魔師

【Ｎコード】
Ｎ３４５８ＢＡ

【作者名】
荒戸孝

【あらすじ】
現世、最強の祓魔師（エクソシスト）として力を振るう隼人の前世は、魔界の王と言われた極悪非道、最恐最悪の悪魔だった。

序章

前世。

ごくまれに、その記憶を持ったまま現世に生まれ出るものがいるらしい。

俺もその中の一人だった。

初めは、それが前世の記憶だなんて思わなかった。毎晩毎晩同じ夢を見るのは、ただ単にストレスが原因だと思っていた。

両親を、目の前で失ったあの衝撃のせいだと――

血塗れた感覚、嘔吐しそうなほどに生臭い匂い、目の前の両親だった“肉塊”。

緋色に染まった手掌がフラッシュバックの誘因となり、俺のなかの前世の記憶が呼び覚まされるようになった。

目の前に広がる煉獄の世、俺は人の姿を為してはいなかった。目の前にある物が人だろうが人外だろうが、ガキだろうが老人だろうが。俺の司る感覚全てに掛かったものを殺し続けた。上がる血飛沫に体を汚し、幾多もの断末魔を切り裂きながら、それでも己から湧き上がり続ける殺しの衝動を抑えることはできなかった。

ただ、俺はそんな己に苦しむような心を持っていなかったらしい。

その夢を見ている時、俺は――

恍惚を覚えるほどの快楽に支配されていた。

第1話：死神少女

一瞬、我を忘れていた吉良隼人(きらはやと)は、ポケットから鳴り響いていた電子音に呼び覚まされた。かなり長くなっていたのだろう。数名が怪訝な顔で、チラチラと隼人の方を見ていた。中には、彼を熱っぽい視線で見つめるＯＬや女子高生も混ざってはいたが。

高校へ行くための電車を待つホームは、朝のラッシュでかなり込み合っていた。まだ時間があるかと、並んでいた列から離れ、なるべく騒音がマシそうな柱の陰へ行ってスマートフォンを耳に当てる。

「もしもし」

『あ、もしもし、お兄ちゃん？』

「史織(しおり)」

聞こえた妹の声にため息をつく。

『ねえねえ、今日の晩御飯は何にする？　早く帰って来るんだよね、遅くならないんでしょ？』

「お前は俺の奥さんか」

『へ……っ？　もう兄妹(きょうだい)だから心配してるの、変なこと言わないでっ』

白い肌を赤くして、ワタワタと否定する史織の顔が目に浮かぶ。

両親が亡くなってからというもの、史織は以前にも増して兄である隼人を慕うようになった。元々ブラザーコンプレックスの気はあったが、今はもっと酷い。隙あらば日に何度も電話をかけてくるし、街を歩けば腕を絡め、テレビを見る時も傍を離れそうとしない。

両親をあんな形で突然失った恐怖と不安から、史織はまだ抜け出せてはいないのだろう。三年経った今も。

だから兄妹とはいえ必要以上にベタベタするのは良くないと思いつつ、自分が冷たくあしらうことで傷口を広げてしまうことを恐れて好きにさせていた。

『お兄ちゃん？』

「ああ、悪い。たぶん今日もいつも通りに――」

「どうせ俺なんて……生きてたってしかたないんだ……俺なんて……」

どこかからか、そんなつぶやきが風に乗って聞こえてきた。

顔色の悪いサラリーマン風の男が、フラフラとホームへ歩いていく。すぐそばの電光掲示板には、電車の接近を知らせていた。

「史織、ちょっと後でかけ直す」

『え？　お兄ちゃ――』

「うっふふふ、そうだ。貴様など生きている価値は無い。死ね、死ぬのだ。そしてそのゴミのような命を私に捧げるがいい！　クソ人間が！」

男の背後には、大きな鎌を持った黒装束の少女が“浮いていた”。ニヤニヤと男を見下ろし、その耳元でブツブツ囁いている。

「やめろ」

男が列車の迫りくるホームに身を乗り出そうとした瞬間、隼人は少女の細い腕を掴んだ。

「な――ッ！」

少女の囁きが止んだことで、男は我に返ったように目に生気を取り戻す。

「んん？　あれぇ、俺は一体何を……あわわわわ！　あっぶねぇなぁ！」
目の前を電車が通り過ぎる。
「お、お客様、危険ですからあまり前に出られないように！」
「え、あ、す……す、すいません」
駅員に注意され、男はペコペコと頭を下げた。
男の無事な様子に、少女はキッと眉を吊り上げた。
「貴様！　よくも邪魔を！」
隼人の手を強引に振り払った。しかしハタとあることに気付く。
「お前は私が見えるのか……？」
目の前にいるのは、どうみてもただの人間の高校生。しかし、奴は自分に触れることさえした。
少女は弾かれたように周囲を見渡した。あれだけ人ごみに溢れ、混雑していたはずが、自分たちの周りだけにぽっかりと空間が生まれている。
「結界だ」
少女の疑問を察したように、隼人がそう説明する。
彼が指で示した方に目をやると、青白い光を放つ十字架が突き刺さっていた。それが不可視の壁を作っているらしい。
人々は、まるでそこに壁があることを知っているかのようによけていく。だがその実、誰一人今現在目の前で起こっている異変に気づいてはいないらしかった。

「貴様ただのクソ人間ではないな。……何者だ」
少女は警戒を強めるように、綺麗な眉を顰める。
隼人は甲に銀の十字架が入った黒い手甲をはめた。
「祓魔師（エクソシスト）だ」
「何……？」
少女が身を引くより早く、隼人に胸倉を掴まれた。
「くっ……放せ！　放せぇえ！」
小柄な少女は空中でジタバタと足掻く。
「暴れるな」
隼人は少女の目の前にスマートフォンをかざす。少女の顔からデータベースに蓄積されていた情報が検索される。
「な、何だそれは……」
「ただの検索機だ、噛みつきゃしない。リオ・フリナー、種族死神、レベル……たったのAランクか。徳（アレテ）も大して稼げねぇな」
「『たったの』だと？　Aランクの実力を甘く見るな！」

隼人を突き飛ばして距離を取り、持っていた大鎌を大きく振る。
少女とは思えぬ俊敏さと重さを兼ね揃えた一閃が、寸分の狂いも隙もなく隼人の首を刈った。

少女は嗜虐性のある微笑みを浮かべる。
「ふん、どうだ！　これが私の……」
「”これが私の”？」
「――！？」

すぐ後ろで声がして反射的に振り返る。慌てて体を捻ると同時に鎌を振りおろした。
しかし、すでに隼人の姿はどこにもない。

彼は離れた場所で、感情を乱すことなく静かに佇んでいた。
「貴様……舐めおって！　こうなったら」
大鎌を仕舞い、少女は真っ黒な本を取り出して大きく開く。
「死神の力をとくと見るがいい！」
「無駄だ」
「えぇい、うるさい！　『死の囁き』！」
唱えた瞬間、髑髏（どくろ）の付いた本がどす黒く光り出す。
「『命ずる、主は今すぐ我に土下座しろ！　非礼を詫びてその首を差し出すのだ』！」
シーン
「……」
「……む」
だから言っただろうとジト目で立ち尽くす隼人に、少女は顔を朱色に染め、ますます焦りを見せ始めた。
「なぜだ！　なぜ効かん！　人間ごときが生意気な！　くそくそくそッ！」
やけになった少女が、やたらめったらに鎌を振り回す。しかしそのどれもがかすりもしない。

「このっ――！」

一閃を避けて宙へ後転した隼人の手から、スマートフォンが離れて空を舞う。

カメラが隼人の方を向き、少女は画面に現れた検索結果の情報に釘付けになった。

「吉良隼人、祓魔師（エクソシスト）。レベル……ＳＳＳ以上だと……？　ッ――！」

スマホの向こうから伸びるように現れた隼人の手に首を絞めつけられ、柱に押し付けられる。

隼人はもう一方の手でついでに掴んでいたスマホを、大儀そうにポケットにしまい込んだ。

「で？　これで終わりなのか、Ａランクの実力ってのは」

あれだけ動いておきながら、息一つ乱していない隼人に、少女は唇を噛みしめた。

（……ＳＳＳ以上だと？　絶対に勝てんっ！　だがこんなところで人間にやられてたまるか！）

首はさほど苦しくはないが、十字架（ロザリオ）のついた手甲に触れられていては思うように力が発揮できない。

……しかし相手は男。

できることはまだある。

少女は自分の胸元へ手をやると、豊満な谷間を見せつけるようにおもむろに肌蹴た。

うるうると瞳を潤ませ、頬を赤く上気させ、唇に指を当てながら隼人を上目づかいに見つめた。

「お願い、もうあんなことはしないから助けて……っ、何でも言うこと聞くから。ね～？」

少女は隼人の鎖骨を艶めかしくなぞる。

「何でも？」

コクリと従順そうに頷き、ぐいぐいと白い谷間を強調する。

隼人はニンマリと笑うと、

「だったら自分で消滅しろ」

魔除けの札を彼女の額に張り付けた。

「あつつつっつぁ！　何をする！」

暴れた拍子に手を放され、ドスンと地面に落された。少女は煙の吹き出る札を急いで引きはがし、息を噴き上げて額を冷やす。

眉を吊り上げ、涙目で隼人を見上げた。

「貴様！　女子（おなご）がこのように恥ずかしい恰好でお願いしているのだぞ！？　別に言うことあるだろう！」

「はあ？　そんな中途半端な恰好で何抜かしてやがる。全部脱いでから言えよ」

「な……なに！？」

早送りで見る紅葉のように、少女は見る見るうちに真っ赤になった。

「脱げよ、ほら。早く脱いでお願いしてみろ、死神」

床にへたり込む少女の背中を、容赦なくぐりぐりと踏みつける。

（この男……ドSか――っ！　でも何？　この内から湧き上がる感覚はっ……違う、踏みつけられて嬉しいなんて……死神のこの私がドMだなんてこと……あーもっと強く踏みつけてぇ～、じゃない！　しっかりせんか、私！）

死神少女はどうにか体を捻ると、

「な……ならば取引しよう！」

隼人は嘆息した。最早このやり取りに飽きはじめているらしい。

「今更何の取引をするって言うんだよ」

「殺してやる。貴様……殺したいほど恨んでる奴がおるだろう」

隼人の眉がピクリと動いた。

「そう……貴様の親を轢死（れきし）させた相手だ」

「やめろ」

「ああー見える。……そやつは酒を飲んで無謀な運転をしていたようだな。謝罪の一つないどころか、お前の顔を見るなり毒づいたのだな？　ふむふむ」

「やめろって言ってるだろ……」

「『お前の親どもが死にやがったせいで、俺がこんな目に遭ったんだ！』とな。悔しかったろう。無念だったろう？　違うか？　私なら思い切り苦しめてから殺……っ」

ドォン！　と地面に押し倒された死神少女の頭の横に、隼人の拳がめり込んで穴が空く。

「それ以上、無駄口を叩くな……」

怒りに狂い見開かれた隼人の瞳孔の奥に、一瞬、蠢く物が見えてゾッとした。
「貴様人間ではないのか……？　なぜそうも悪魔臭い」
隼人は残忍な笑みを見せた。いや、どこか自嘲的な笑みにも見える。

「死神のくせに敵である祓魔師のこともしらないのか。来世はせいぜい、よくお勉強することだな」
「待て……話はまだ」

瞬間、隼人は少女を横抱きにして飛びのいた。
「な、なんだ突然！」

先ほどまで少女がいたところには、深々と白銀の刃が突き刺さっていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3458ba/

転生―エクソシスト―祓魔師

2012年1月8日23時51分発行